

A study on the role of Patrick Geddes in the early period of City Planning in the western countries

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 達 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/759

欧米の都市計画創成期における パトリック・ゲデスの役割に関する考察

A study on the role of Patrick Geddes
in the early period of City Planning in the western countries

松田 達^{*}
Tatsu Matsuda

1. はじめに

パトリック・ゲデス (1854-1932) は、長らく十分な評価がされてこなかった人物である。イギリスではオックスフォードやケンブリッジといった主要な大学で社会学が育たなかったことによって、アメリカではシカゴ学派の社会学者によってその意義を理解されなかったことによって、近年になるまでその活動の全貌が正当に評価されてこなかった。1970年代頃よりヘレン・メラーがゲデスの再評価を行い、1990年に発表された『パトリック・ゲデス：社会進化論者と都市計画家』¹ははじめての本格的なゲデス研究であり、ゲデスの伝記として読むことができる。また、フォルカー・M・ウェルターは2002年の『ビオポリス：パトリック・ゲデスとシティ・オブ・ライフ』²を著し、ゲデスの思想を生物学とギリシャのポリスという二つのテーマから検討し直した。このように、ゲデス研究が本格的になってきたのは、ごく最近である。

ゲデスは同時代人のエベネザー・ハワード (1850-1928) に並ぶ、イギリス近代都市計画の重要な源流の一人である。生物学から出発したが、眼病を患ってその道を断念し、そこから社会学、地理学、都市計画、教育学といった幅広い分野で活躍し、また市政学 Civics という学問を打ち立て、世に問うた。その範囲は幅広く、近代都市計画史において、ゲデスのなしえたことは、まだ正確に位置づけられているとはいえない。そこで本稿では、欧米の都市計画創成期におけるゲデスの位置づけを、建築、都市的な文脈と照合させることで試みるとともに、ゲデスが現代に持つ可能性についても考察する。

2. 都市計画創成期におけるゲデス

2.1 パトリック・ゲデスの生い立ち

パトリック・ゲデスは、1854年にスコットランドの西アバディーンシャー、バラターに生ま

¹ Meller, Helen, *Patrick Geddes: Social Evolutionist and City Planner*, Routledge, 1990

² Welter, Volker M., *Biopolis: Patrick Geddes and the City of Life*, The MIT Press, 2002

* 工学部講師 (建築デザイン学科)

れる。植物学を学ぶためにエディンバラ大学に入学するが、ダーウィン派の生物学者トマス・ハクスリー (1825-1895) の著書『地形の訓戒』を読んで感銘をうけたことから、ロンドン王立鉱山学校に移り、ハクスリーから生物学を学ぶ³。1880年から1889年までの間、エディンバラ医科大学の助手を務めるとともに、非常勤講師として動物学の講義を行っていた⁴。1889年から1918年までダンディー大学で植物学の教授として教鞭をとり、1919年から1924年までボンベイ大学の社会学科の学科長を務めた。ゲデスはいかなる学位も取得しなかったが、一方であまりに幅広い分野で活躍し、その成果を残した。

ゲデスは1880年代からエディンバラで活動していたが、この時期、ゲデスは自然科学の論文を発表するとともに、経済学について、ジョン・ラスキン (1819-1900) について、美術展についてなど、科学的ではない問題についての論説も発表しており、単に科学者としての研究だけではなく、社会問題への関心も垣間見られる。ゲデスは1892年にエディンバラで購入した天文台の建物を「展望塔 Outlook Tower」と呼ばれる建物に改装し、都市の研究所、及び展示の場所として機能させた。そこにはフランスの地理学者エリゼ・ルクリュ (1830-1905) やドイツの生物学者エルンスト・ヘッケル (1834-1919) など、様々な分野から多くの学者が訪れた。また、ゲデスが企画した「都市と都市計画博覧会」は、1910年代にアントワープ、パリ、ボンベイなど多数の都市で開催され、この展覧会や主著『進化する都市』(1915)を通して、ゲデスの思想は広く世界へと知られていった。

2.2 ル・プレイからゲデスへ

ゲデスはチャールズ・ダーウィン (1809-1882) による進化論や、ラスキンの思想、またオーギュスト・コント (1789-1857) の社会学など、当時の様々な知的環境から影響を受けたが、特に大きな影響を与えたのは、フランスの社会改良家ル・プレイ (1806-1882) による地域調査によるアプローチである。ゲデスは1878年にはじめてフランスを訪れ、ブルターニュ地方のロスコフで生物学の調査を行った後、ちょうどパリ万国博覧会が行われていたパリに赴き、普仏戦争から再建しつつある都市を見て大きな刺激を受けた⁵。その後、同年の冬から翌年にかけて、ソルボンヌ大学で、教育学者で社会学者であったエドモンド・ドモラン (1852-1907) による、その師のル・プレイについての講義を聞いたことをきっかけに、ル・プレイの社会調査の手法を創成期のイギリス都市計画へと導入していくことになった。

ル・プレイは、フランスの社会学者であり、エコール・ポリテクニークとエコール・デ・ミン (パリ国立高等鉱業学校) を卒業後、鉱山技師を経て、第二帝政期の高級官僚となった人物である。社会の観察を行い、統計データを数理的に分析するという科学的手法は、フランスでも後世に大きな影響を与えた。ル・プレイは基本的な調査項目として「場所」「仕事」「家族」というカテゴリーをあげているが、ゲデスはこの「家族」を「人々」と焼き直して

³ 西村一郎「著者パトリック・ゲデスについて」(パトリック・ゲデス著、西村一郎訳『進化する都市』、鹿島出版会、2015、pp.372-374)

⁴ ゴードン・チェリー編、大久保昌一訳『英国都市計画の先駆者たち』(学芸出版社、1983) p.64 (Cherry, Gordon E. (ed.), *Pioneers in British Planning*, Architectural Press, 1981)

⁵ Meller, *op. cit.*, pp.31-32

用いている。ル・プレイはフランスにおける科学としての都市計画の成立にも影響を与えており、例えば、ル・プレイの弟子のエミール・シェイソン（1836-1910）は、1894年に設立された社会改良組織ミュゼ・ソシアル⁶の創設者の一人である。1911年にミュゼ・ソシアルから派生的に生まれたフランス都市計画家協会の創設者は、ウジェーヌ・エナール（1849-1923）、レオン・ジョスリー（1875-1932）、アンリ・プロスト（1874-1959）など、当時のフランスに強い影響力を持った都市計画家、建築家らであり、フランスにおける都市計画の概念そのものも、こういった人脈をひとつの中心としつつ、1910年代に醸成されてきた。その後、1919年にはフランスでコルニユデ法と呼ばれる最初の都市計画法が制定され、また都市計画研究及び教育の中心となる都市高等研究所⁷が設立され、フランスの都市計画が *urbanisme* という概念のもとに成立していく。ゲデスもイギリス都市計画の創成に大きな影響を与えていくので、ル・プレイはイギリスとフランスの都市計画の共通の祖先の一人ということになる。

2.3 ゲデスと田園思想

ゲデスは、エベネザー・ハワードによる田園都市思想にも共鳴し、特に実際に田園都市を設計したレイモンド・アンウィン（1863-1940）とは密接な関係にあった。アンウィンとは1911年から1914年にかけてアイルランドで、その後はインド、エルサレム、パレスチナなどで仕事をともにしている。『進化する都市』のなかでも田園都市運動については十分評価しているが、1915年当時は田園都市運動がまさに世界中を席卷して展開していた時期であり、多くを語らずにエワート・G・カルピン（1877-1946）による『今日の田園都市運動』などを紹介する形で同時代の動きに触れている程度である⁸。

ゲデスが1910年代以降展開する一連の「都市と都市計画博覧会」を、戦災復興展の一部としてパリに誘致した人物には、法律家・ジャーナリストで、フランス田園都市協会を設立したジョルジュ・ブノワ=レヴィ（1880-1970）がいる。ブノワ=レヴィは、イギリスの田園都市思想を初めてフランスに伝えたとされる人物であり、ミュゼ・ソシアルからの依頼で調査を行い、1904年に『田園都市』を、また1905年に『アメリカの田園都市』を出版していた。なおエルザ・フォナウによれば、ブノワ=レヴィは1901年にイギリスを訪れた際に、ゲデスの指示によって、ポート・サンライトやボーンヴィルの工業村のような小さな産業的共同社会が、とてもよい状態で存在していることを発見したのだという⁹。

またブノワ=レヴィは、シャルル・エドゥアール・ジャンヌレ（後のル・コルビュジエ）（1887-1965）のサン・ニコラ・ダリエルモンの田園都市計画について「フレンチ・ガーデン・ハムレット」というタイトルで、アメリカの『サーヴェイ』誌やイギリスの『都市計画批評』誌

⁶ 「社会博物館」という意味であるが、もともとはパリの万国博覧会をサポートするためにつくられた組織。

⁷ *École des hautes études urbaines*.

⁸ パトリック・ゲデス著、西村一郎訳『進化する都市』（鹿島出版会、2015）pp.167-171（Geddes, Patrick, *Cities in Evolution*, London, Benn, 1968 (orig. 1915)）

⁹ Vonau, Elsa, *La fabrique de l'urbanisme : Les cités-jardins, entre France et Allemagne, 1900-1924*, Presses Universitaires du Septentrion, 2014, p.31

に紹介¹⁰した人物でもある¹¹。ゲデスとル・コルビュジエについては、あまり接点を触れられることはないが、ブノワ=レヴィは同時代に両者に直接的に関わった人物の一人である。

2.4 展望塔と巨大地球儀

エディンバラの「展望塔」には、ゲデスが集めた様々なコレクションが分類展示された。最上階にカメラ・オブスキュラがあり、そこからエディンバラ、スコットランド、言語¹²、ヨーロッパ、世界と上から名前が付されている。訪れたものはまず最上階に上がり、そこからそれぞれの階の展示物を見ながら降りてくる。ゲデスはここを「社会学的実験室」として用いた。またこの建物自体は、世界の「インデックス・ミュージアム」という役割を担う。ゲデスはこの「展望塔」を訪れたフランスの地理学者エリゼ・ルクリュが、1900年のパリ万博で直径62メートルにもなる巨大な地球儀博物館を計画することに協力した。1895年の最初の計画は、正確に10万分の1の大きさの地球儀をつくらうというもので、直径160メートルもある巨大な計画であり、その周りを螺旋状に24周する通路が巡るというものである。その後、この計画は段階的に縮小され、最終的には50万分の1の地球の大きさに変更となった¹³。ゲデスも、実現に向けてアメリカでの資金集めをしていたが、結局、資金の確保ができずに撤回された。一方、競合者であり地球儀に対して天球儀を提案していた建築家アルベール・ガルロン(1846-1901)による資本主義的な案が、コスモラマという名前で実現された。なお、ルクリュの構想案については、建築家ルイ・ボニエ(1856-1946)が1898年に卵型でアール・ヌーヴォー風のドロ잉を残している¹⁴。このルクリュ-ゲデスの巨大地球儀は、立体版の「展望塔」とも読み替えられよう。

2.5 ゲデスとル・コルビュジエの媒介者ポール・オトレ

ゲデスは1900年のパリ万博において、サマーセミナーを企画し、ここでベルギーの活動家ポール・オトレ(1868-1944)や弁護士のアンリ・ラ・フォンテーヌ(1854-1943)に出会っている。オトレが後に構想する、世界の知識を体系化しその情報を集めた都市「ムンダネウム」(世界中心)の設計はル・コルビュジエに依頼される。ル・コルビュジエは1928年にムンダネウムの構想案を発表したが、それは後に「無限成長美術館」へと発展するように、ピラミッドをめぐるような螺旋状の構造を持っていた。この中心には地球儀があった。ということは、もとを辿れば、ルクリュの大地球儀、そしてゲデスの「展望塔」へと行き着くだろう。

ただし、これはすべてル・コルビュジエのアイデアというよりも、むしろ依頼したオトレが持っていたアイデアも多かった可能性が強い。八東はじめによれば、ムンダネウムの打

¹⁰ いずれも1918年。

¹¹ Brooks, H. Allen, *Le Corbusier's Formative Years: Charles-Edouard Jeanneret at LA Chaux-De-Fonds*, Univ of Chicago Press, 1997, pp.484-485

¹² 「英語圏」のことを指している。

¹³ Alavoine-Muller, Soizic, "Un globe terrestre pour l'Exposition universelle de 1900. L'utopie géographique d'Élisée Reclus", in *L'Espace géographique*, 2003/2 (tome 32), pp.156-170

¹⁴ Welter, *op. cit.*, pp.177-180

ち合わせにあたって、オトレはル・コルビュジエに相当量の資料を提供しており、オトレ側でプロジェクトについてのかかなり具体的な構想があったことが伺われるという¹⁵。ゲデスとル・コルビュジエに直接的な出会いは記録されていないが、オトレがその思想の媒介者であったようであるらしい。なぜなら、オトレは1900年以降、1932年のゲデスの死まで定期的にコンタクトを取り続けていたが、特に頻繁だったのは1920年代後半であり、まさにその時、オトレはル・コルビュジエと連絡を取っていた時期であったからであるという¹⁶。アンソニー・ヴィドラーも「モダン・ミュージアム」がゲデスからル・コルビュジエへと間接的に引き継がれていったことについて、かなり詳細に触れている¹⁷。

一方で、同じ世界の体系的一覧化を意図していても、ゲデスとオトレ（もしくはルクリュ）の原点には決定的な世界観の違いがあった。ゲデスは階層的で不連続的な「塔」を世界の縮図に用いているのに対して、ルクリュやオトレは統一的で連続的な「球」を世界の中心に来るものとして位置づけた¹⁸。前者はあくまで地域主義に根ざし、後者はあくまで国際主義に根ざしている。したがって、ゲデスとオトレは数多く協働してプロジェクトを行おうとしていたにも関わらず、いずれも失敗し、唯一うまく実現できたのは、1913年のгент万博において世界で初めて開かれた都市会議にあわせてゲデスとオトレが協働して企画した「都市比較展」だけであるという¹⁹。

2.6 市政学という学問分野

1900年以後、ゲデスはロンドンに移る。1903年にゲデスの弟子であるヴィクトール・ブランフォード(1863-1930)は社会学会を組織し、ゲデスはそこで中心的役割を果たしていく。1904年と1905年の社会学会において、ゲデスは「応用社会学としての市政学」という論考を発表する。ゲデスがここで用いたのはCivicsという言葉であった。当時、まだイギリスでは「都市計画」に該当するTown Planningという言葉はなかった。ゲデスは都市学と社会学の結合を考えていた。Civicsという言葉は示唆的である。日本語では市政学とも訳されるが、市民の政治的、社会的運動に関する学問である。同時期に生まれてくるTown Planningが都市の物理的な計画に関することを指し示しているのに対し、Civicsは都市の社会的側面を含んだ改良に関することを指し示しているといえるだろう。同じ都市について扱っていても、その都市的側面と社会的側面というある意味対極でもある方向性だといえる。なおゲデスは『都市の進化』においてはCivic Sociologyという言葉を用いている。CivicsはTown Planningに比べて、決して構成に普及していった言葉ではないが、当時、フランスではurbanisme、ドイツではStädtebau、アメリカではCity Planningというように、各国で別々に「都市計画」に関する概念が出来上がってくるなか、イギリスではTown Planningに対して対極的なアプ

¹⁵ 八東はじめ『ル・コルビュジエ 生政治としてのユルバニスム』（青土社、2014）、pp.129-156

¹⁶ Crinson, Mark, *Rebuilding Babel: Modern Architecture and Internationalism*, I.B. Tauris & Co Ltd, 2017

¹⁷ Vidler, Anthony, "The space of history : modern museums from Patrick Geddes to Le Corbusier", in Michaela Giebelhausen (ed.), *The Architecture of the Museum: Symbolic Structures, Urban Contexts*, Manchester, Manchester University Press, 2003, pp.160-182

¹⁸ Chabard, Pierre, "Towers & Globes : architectural and epistemological differences between Patrick Geddes' Outlook Towers and Paul Otlet's Mundaneums" in RAYWARD, Boyd W. (dir.), *European modernism and the information society. Informing the present, understanding the past*, Londres : Ashgate, 2008, (chapitre 6), pp.105-126.

¹⁹ Ibid., p.106

ローチをする概念が生まれていたともいえる。しかし、田園都市が世界的な運動に発展していくなか、ゲデスはハーワードのような目に見えた影響力を持つことはなかった。ゲデス自身にとってもっとも大事だったのは、この Civics という概念が示す都市に関する学問であった。そこには社会学、地理学、政治学など様々な学問分野が重なり合っている。アンウィンは Town Planning を実践的な学問として展開しようとしていたが、ゲデスはむしろ複合的で幅広い学問として Civics を捉えようとしていた。

2.7 シカゴ学派とゲデスの忘却

ゲデスは Civics をまさに応用社会学として定義しようとしていたが、本流とされる社会学の展開の流れのなかでは、ゲデスはずっと忘れられた存在になっていった。

社会学が急速に発展したのはアメリカのシカゴである。1890年に設立されたシカゴ大学には、当初ゲデスの影響を受けたチャールズ・ズェ布林(1866-1924)やジェーン・アダムズ(1860-1935)らがいた。藤田弘夫によれば、第一次世界大戦後にはウィリアム・I・トマス(1863-1947)とロバート・E・パーク(1864-1944)ら、より科学的手法を積極的に取り入れた社会学者が主流となっていき、社会改良を目指す市政学 Civics は次第に社会学から切り離されていったのだという²⁰。シカゴの社会学は、その後、パークとアーネスト・バージェス(1886-1966)が主導し、二人の共著『社会学という科学への入門』(1921)は、グリーンバイブルとも呼ばれ、シカゴだけではなく以後のアメリカの社会学全体に影響を与えた。ジャーナリスト出身のパークは、文章に明快さを求めたが、ヴェルナー・ゾンバルト(1863-1941)のようなヨーロッパの社会学者からは、パークらは統計的資料を集めているだけだと批判されたという²¹。バージェスは都市を中心から同心円状に5つの地帯に分類するという同心円モデル理論(1925)を提唱し、社会学に大きなインパクトを与えた。次いで主導的立場に立ったルイス・ワース(1897-1952)は、都市から農村までを連続的に捉え(都邑連続体説)、人口、密度、異質性が増えるにしたがって、都市に特徴的な生活様式(ワースはこれをアーバニズムと定義)が増加するとし、都市と農村の連続性を定式化した²²。こういったアメリカ都市社会学のなかで、ヨーロッパの知的文脈のなかで自らの学問を醸成していったゲデスや、ゲデスの影響下から大成した文明史家ルイス・マンフォード(1895-1990)は、ほとんど触れられることがなかった。

2.8 社会美術館と都市博覧会

ゲデスを位置づけるためにもうひとつ必要な要素として「都市と都市計画博覧会」の開催は欠かせない。この展覧会は都市計画に関する議論のために世界各都市で開催された一連の展覧会で、1910年のRIBAにおけるロンドン都市計画会議において、エディンバラの調査が展示されたことをはじめりとして、その後、エディンバラ(1911)、ダブリン(1911)、ベル

²⁰ 藤田弘夫「P. ゲデスと都市社会学の展開」『哲学』114, 1-28、慶應義塾大学、2005、p.10

²¹ 藤田、同上、p.15

²² ルイス・ワース、高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学 増補版』(誠信書房、1978) (Wirth, Louis, "Urbanism As A Way of Life" in *AJS* 44, S. 1-24, 1938)

ファスト (1911)、ゲント (1913)、マドラス、カルカッタ、ナグプール、ラクナウ (1916)、パリ (1916)、ボンベイ (1918)、エルサレム (1920) と 1910 年から 1920 年までの 10 年間で世界各地を巡回した。もともと「展望塔」で集められた資料が母体となり、そこに様々な都市計画資料が付加されていった。

この展覧会を位置づけるには、もう少し大局的な視点で見ておく必要がある。1890 年代から多くの「社会美術館」が欧米の主要国で生まれ、1910 年代からは多数の大規模な「都市博覧会」が世界各地で開催されるようになった。エディンバラのゲデスによる「展望塔」(1892)はその嚆矢であり、パリのミュゼ・ソシアル (1894)、フランシス・G・ピーボディ (1847-1936) によるハーバード大学のソーシャル・ミュージアム (1903)、レオポルド・カッチャー (1853-1939) による Social-Museen (1904)、バルセロナのムゼオ・ソシアル (1909) と続く。1910 年前後から、都市博覧会が一気に開催されていく。ベンジャミン・C・マーシュ (1878-1952) がまとめたニューヨークにおける「人口過密展」(1909)、ボストンにおける「ボストン 1915」(1909)、ヴェルナー・ヘーゲマン (1881-1936) が企画したベルリン都市計画展 (1910)、デュッセルドルフの国際都市展 (1910)、さらにロンドン都市計画会議の際の都市計画展 (1910)、ゲントの都市比較展 (1913) など、同時多発的に開かれていく。「社会美術館」から「都市博覧会」という流れは、一連のものであると解釈できる。それぞれの違いはあるが、基本的には都市や社会に関する様々な情報を集め、大衆に向けて陳列し、都市についての教育を行い、市民参加をもとにした都市計画を促す。

ゲデスは、エディンバラの「展望塔」を、都市や社会の問題を調査研究し、一般の人にも広く開くことで、都市についての公共的な教育の場を提供する施設として用いた。その内容をさらに外部に開き、多くの人に影響を働きかけたものが「都市と都市計画博覧会」である。19 世紀末から 20 世紀にかけての人口の急速な過密化と都市問題の増加は世界的な傾向であり、同時期に欧米各国で「社会美術館」が生まれ「都市博覧会」として展開していったのは偶然ではない。ゲデスの動きが重要であるのは、もっとも早い段階に独力で「展望塔」を組織し、またシカゴやパリの万博を参照しつつ、「都市と都市計画博覧会」を様々な都市で何度も開催していったことである。

2.9 ゲデスとヘーゲマン

1910 年のベルリン都市計画展は当時の欧米の都市計画関係者の多くが訪れていたが、極めて意外なことに、目的や内容も似ているこの展覧会にゲデスが訪れていなかったことが分かっている²³。ベルリン都市計画展は 1910 年の 5 月から 6 月にかけて開催され、ロンドンの都市計画会議は同じ年の 10 月に開催された。例えば、ゲデスと親しかったアンウィンは、ベルリンの展覧会にはむしろ素材を提供する側で関わっており、当時すでに世界中を旅行していたゲデスがこの展覧会を訪れなかったことは意外としかいいようがない。その原因は分からないが、30 歳近く年の離れたゲデスとヘーゲマンという、都市改良を志向し、また都市

²³ Collins, Christiane Crasemann, "City Planning Exhibitions and Civic Museums: Werner Hegemann and Others" in Werter, Wolker M. (ed.), Lawson, James. (ed.), *The City after Patrick Geddes*, Peter Lang Publishing, 2000, p.114

計画の国際化に大きな役割を果たした二人の立役者は共通点も多く、お互いの存在をむしろ強く認識していたと考えられよう。

ピエール・シャバールは、ゲデスとヘーゲマンの展覧会に対するアプローチは近かったが、ゲデスのアシスタントをしていた建築家のフランク・C・メアーズ (1880-1953) が、ヘーゲマンの展覧会の手法についての強く批判をしていたことを指摘している²⁴。メアーズは建築家であり、1908 年以降ゲデスのアシスタントとして、エディンバラ都市調査をはじめ様々なプロジェクトに協力をしていた。また 1915 年にはゲデスの娘ノラと結婚しており、ゲデスは養父という近い関係になる。メアーズはヘーゲマンとほぼ同年齢でもあり、ゲデスが意識したというより、むしろメアーズがヘーゲマンについて強く意識していた可能性があるだろう。

なお、展示物の扱いに関して、ゲデスはヘーゲマンよりドキュメントをより象徴的なものとして扱っており、読まれるよりも見られるもの、理解するものというより感覚的なものとして扱っていたことという²⁵。1879 年から 1880 年にかけてメキシコに調査に行った時に一時的に失明し、その後、眼病を患ったゲデスは、ダイアグラムを多用し、物事を図式的に理解、表現しようとする傾向が強かった。視覚に頼らずに世界を認識する方法について意識的だったのだと考えられる。

3. まとめ

3.1 多様な知的文脈のなかに位置づけられるゲデス

ゲデスは、ヨーロッパにおける複雑で多様な知的文脈の上に、都市に関するゲデス独自の学問、市政学 *Civics* を構築しようとした。ダーウィンの進化論とル・プレイの地域調査をバックグラウンドに活動を展開し、「進化する都市」の未来を展望した。社会美術館としての「展望塔」を舞台に活動し、後に「都市と都市計画博覧会」としてその内容を世界に向けて展示していった。統計や数値を重視した明晰なだけの社会学ではなく、社会改良を志向し、都市に関する地理、歴史、政治、教育といった様々な要素を組み込んだ応用社会学としての市政学の重要性を主張した。特に同時期に概念が定着していく都市計画 *Town Planning* に対して、ゲデスの市政学は専門的になりすぎず、地域に根ざし市民を巻き込む社会的運動としての学問の可能性を示唆していたと言えよう。都市を空間として組織する学問が *Town Planning* であるのに対し、都市を社会として扱う学問が *Civics* であった。

ハワードの田園都市が世界的な運動になっていくなか、ゲデスは長らく十分な評価をされておらず、アメリカ社会学ではほとんど忘却されるほどでもあった。しかし 19 世紀末から欧米各国においてそれぞれの起源から醸成されてきた「都市計画」という分野において、ゲデスは極めて先駆的な役割を果たした。「都市計画」に科学的手法をもたらすだけでなく、

²⁴ Chabard, Pierre, "Competing scales in transnational networks: the impossible travel of Patrick Geddes' Cities Exhibition to America, 1911-1913", in *Urban History*, 36(2), Cambridge University Press, 2009, p.212

²⁵ *Ibid.*, p.213

科学的手法だけでは足りない要素についても意識的であった。

ゲデスの「展望塔」には、都市だけでなく世界の博物館という位置づけもあった。ゲデスは地理学者のエリゼ・ルクリュに共鳴し、1900年のパリ万博では世界の縮図としての巨大地球儀を実現させようとした。これは球体となった「展望塔」でもあった。「ムンダネウム」の実現を目指したポール・オトレを介して、ゲデスが展開しようとした近代的な「社会美術館」の概念は、ル・コルビュジエにも引き継がれていった。ゲデスの組織した「都市博覧会」は、同時期にヘーゲマンがまとめた都市計画展などとともに、「都市計画」を国際化し、以後の都市の発展に寄与した。

ゲデスは1915年以降、インドを中心にエルサレムやパレスチナなどでさらに実践的な仕事を多数展開する。したがって、ここでゲデスの豊潤で幅広い活動成果をすべてまとめることは出来ない。しかしながら、第一次世界大戦以前に欧米各国で創成してきた「都市計画」という概念において、ゲデスは独自の重要な役割を果たしてきた。

3.2 21世紀の都市におけるゲデスの可能性

ゲデスが21世紀の我々にとって示唆的であり続けることには、いくつかの理由がある。通常は結びつかないであろう、生物学と都市計画といった離れた領域の思考を独自の方法で結びつけていったこと、急速に国際化が展開する20世紀初頭の社会のなかで、地域主義に根ざした思考と実践を続けていったこと、「展望塔」を「社会学的実験室」として多様な目的で活用したこと、簡単に定義の出来ない独自の学問シビックス *Civics* (したがって、本来「市政学」とも「都市学」とも、正確には訳すことの難しい概念) を構築しようとしていったことなど多数ある。異なる領域からの発想、地域を重視する思考、社会実験の可能性、領域横断的な概念構築など、現在の都市問題に対しても、必要とされる方法論であろう。

ゲデス研究は、いまなお進行中であるといえる。2000年以後、ゲデス関係の研究書が次々と出版されている²⁶。本稿では、都市計画の創成時に果たした役割という観点からゲデスを見てきたが、ゲデスを都市計画の起源のひとつに関わった人物としてあらためて位置づけることによって、ハワードの田園都市が主流とされてきたこれまでのイギリス近代都市計画について、またひいては欧米の近代都市計画全体の流れについて、新たな視点で描き直すことが出来るだろう。田園都市から住宅・都市計画法を経て戦後のニュータウンへという単線的な流れではなく、ゲデスとハワード、もしくは市政学と田園都市という、都市計画の二つの特徴的な流れが母体となり、またそれらが絡み合いながら、イギリスの都市計画がダイナミックな運動として展開してきたと考えることが出来るだろう。ゲデスはハワードと異なり、スコットランドというヨーロッパの周縁に位置する地域から出発し、ヨーロッパをさらに超えて、インドや中東といった地域の計画にも関わりながら、世界的な領域で活動を展開させた。ゲデスとその活動を詳細に追うことで見えてくる、このような動的で複合的な運動体としての近代都市計画の流れをあらためて描き出すことは、単線的な手法だけでは決して解決しな

²⁶ Welter, Volker M. (ed.), *The City After Patrick Geddes*, Peter Lang, 2000; Fowle, Frances (ed.), Thomson, Belinda, *Patrick Geddes: The French Connection*, White Cockade Publishing, 2004; Scott, John, Ray Bromley, *Envisioning Sociology: Victor Branford, Patrick Geddes, and the Quest for Social Reconstruction*, SUNY Press, 2013 など。

い 21 世紀の都市の問題に対して、複数の観点から示唆を与えることになるだろう。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 26870152 の助成を受けて行った研究の一部である。ここに記し、深く感謝いたします。